大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

「過大・過密」「教室不足」解消へ地域に根ざした支援学校整備を

「府内各地域に知的障がい支援学校の新校整備を求める請願」署名を提出

大阪府議会に2万6153筆

2月28日、大阪の障害児教育をよくする会（以下、よくする会）、大阪障害児・者を守る会、障害者（児）を守る全大阪連絡協議会、全国障害者問題研究会大阪支部で構成する大阪障害児教育運動連絡会は、今年で5年目となる「府内各地域に知的障がい支援学校の新校整備を求める請願」署名を大阪府議会事務局に提出しました。提出行動には、各地域のよくする会や障害児者団体などから7人が参加し、一人ひとりがねがいを語りながら署名を手交しました。署名は後日集約分を合わせて2万6153筆に達しました。

府内各地域に抜本的な支援学校増設を

署名提出にあたって、よくする会の岩田会長は、「地元に支援学校があるのに生活圏域・福祉圏域のちがう遠く離れた支援学校まで60分もバスに乗って通学している。その学校も年々『過大・過密』『教室不足』が進行している。『過大・過密』『教室不足』が解消されるよう府内各地域に支援学校を整備してほしい」と訴えました。別の保護者は、「地域の学校の支援学級で学んでいる。支援学校が少なく通学に時間がかかるので、進路の選択肢に入れられない。選択肢に入れられるようたくさん学校をつくってほしい」とねがいを伝えました。さらに別の保護者は、「障害児教育の教育条件を整えることは当事者やその家族のみならず、これから子どもを生み育てるすべてのひとの安心と希望につながる」と自身の体験を通じて語り、署名を手渡しました。

署名を手交するよくする会の岩田会長

全国最悪の「教室不足」劣悪な学習環境が話題に

今年度の請願署名のとりくみは、2022年3月に文部科学省が「公立特別支援学校における教室不足調査の結果について」を公表し、大阪は全国最悪の5・28室不足していることが明らかになるもとでのとりみとなりました。

この事実を広く府民に知らせるとりくみをすすめようと、今年度はA5サイズの見開きリーフを5万枚作成し、障害児者団体や労働組合、民主団体にひろげ、各地域での署名宣伝などで活用しました。

また、よくする会は、府立支援学校の劣悪な学習環境を写真入りで分かりやすく伝える冊子「障害のある子どもたちに当たり前の学習環境を～府立支援学校の実態～」を発行しました。発行に当たって、大阪教育記者クラブで記者レクを開催しました。事前取材と合わせて9社が参加し、朝日新聞など、複数のマスコミが府立支援学校の実態を報道しました。

記者レクを行うよくする会のメンバー（2022年12月23日）

私たちの運動の力でつかんだ新校整備

「知的障がい支援学校の新校整備を求める請願」署名は5年間で13万9810筆を集約し、府議会に提出してきました。この運動を通して、「障害のある子どもたちの学習環境の改善を」「地元で通える支援学校を作ろう」等の世論を高め、府議会でも各会派が支援学校の新校整備を求める質問を展開する状況を作り出しました。

そして、2023年度当初予算案で、もと西淀川高校を活用した支援学校整備に続いて、豊能地域と大阪市北東部への新校整備に向けた予算が計上されました。

「過大・過密」「教室不足」「教員不足」を解消するためには、抜本的な支援学校の新校整備が必要です。新たな2校の新校整備を足がかりに、さらなる新校整備を求めていきましょう。

教職員の皆さん。署名へのご協力ありがとうございました。引き続き新校整備の実現へ力を合わせましょう。

大障教ホームページアドレス　http://fc06631220171211.web2.blks.jp/　Eメールアドレス：fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

身体の中からでられない
身体の外から入れない
足りなくても　余ってても
悲しくなっていく

大好きなスピッツの「あかりちゃん」と言う曲だ。ロックバンドの曲名としては「クセ」があり、微笑んでしまう。しかし、その内容は、題名から連想されるものとは違う。

2011年3月11日14時46分、みなさんは何をしていたのだろう。そう、東日本大震災発生時刻だ。すでに12年が経過した。読者の中には、当時小学生だった人もいるだろう。大震災と原発事故で途絶した未来がある。犠牲者はもちろん、家族の崩壊、住むことのできないふるさと、会社の倒産、転校先でのいじめなど。被災地や避難生活を余儀なくされている方々には、「マイナスからゼロに戻っていない」と言う人が多い。そして、原発事故の後処理も全く見通しが立っていない。

そんな中、岸田首相は「可能な限り原発依存度を低減する」との政府方針を投げ捨て、「原発回帰」を打ち出した。

スピッツの草野マサムネは、反原発を主張している。彼は、東日本大震災による甚大な被害とそれによるストレスで歌えなくなり、ライブが中止となった。復帰後の被災地における追加公演のために創作されたのが「あかりちゃん」だ。バンドメンバーは、音楽を届けることで、東日本の被災地支援活動ができればと考えたらしい。「あかりちゃん」には、次の歌詞がある。

君のことばかり考えたい
そんな幸せを取り戻そう
僕は生きる　明日もたぶん
歌いつづけてる

（久）

大障教課別交渉

※前号からの続き

（教職員人事課・教職員企画課・高等学校課）

15分単位で年次休暇取得できるようシステム等の整備を

実習教員部
田中さん

実習教員部は、再任用でハーフ勤務を選択し、週4日あるいは週5日勤務の場合、3時間45分勤務の日が生じるが、その勤務日に年休を取得する場合は、4時間年休を取得しなければならないために不利益が生じることを訴え、15分単位で年休を取得できるよう求めました。

教職員企画課は、「勤務時間条例第13条3項において、『年次休暇は一日を単位として与える。職員から要求があった場合は、一時間を単位として与えることができる』と規定されており、要求にこたえることは困難」と説明しました。

産育休の代替教員の事前任用措置の拡充を

女性部は、今年度実施した女性部実態調査結果を示し、安心して子どもを生み育てられるように必要な措置を講じるよう求めました。とりわけ、産育休の代替教員の事前任用について、取得するすべての教員に年間を通して措置されるよう求めました。

教職員人事課は、「次年度に向けて、支援学校の小・中学部を対象に年度途中に見込まれる産育休の代替教員を年度当初から臨時的任用教員として前倒しで任用措置するという令和4年11月1日付け国事務連絡を踏まえ、検討している」と説明しました。

女性部
荒木さん

寄宿舎教員の採用選考の再開を

寄宿舎教員部は、正規の寄宿舎教員の年齢構成や平均年齢、臨時的任用の人数構成などを資料で示し、極めて異常な実態を改善することと専門性を継承するためにも、ただちに採用選考を実施するよう求めました。

教職員人事課は、「現在の平均年齢や講師比率の高さについて、課題意識は持っている。ただ、寄宿舎指導員の採用については、支援教育課が検討している今後の寄宿舎の運営方針を踏まえ、その可否を判断していく」と説明しました。

寄宿舎教員部
白木さん

第２２回全国障害児学級＆学校学習交流集会in京都

感想ダイジェストその6

２日目に原田文孝さんの講座に参加しました。「障害の重い子どもたちがわかる授業づくり～文化とは何か、文化をわかるとはどういうことか～」というテーマでのお話でした。まず、「子どもはどんなわかり方をしているのか」と、普段の様子から考えることから始まり、「子どもたちの分かり方に合わせて教え方を工夫する」という流れで、授業づくりをされていることを実例を交えて話されました。

一つひとつの実践が、聞いていて心に沁み入るようなこまやかさで、こんな風に子どもに心を添わせて、少しの変化や反応に気づき、その意味づけができる教員集団でありたいなあ、と思いました。そして、子どもたちはこんな先生たちに出会えたら、なんて安心してのびのびと自分らしさを出していけるだろう、と思いました。

「その子のことをわかったつもりでいたけれど、わかっていなかった。わかったと思うことの怖さ」「実態のとらえ方で授業が大きく変わる。実態から課題ではなく本当のねがい（要求）をさぐること」「子どもの要求に合った文化（教材）が、教育的価値が高いのである」など、大事なことをたくさん学びました。

毎年、学習交流集会に参加すると、明日から学校楽しみやな！と、元気が出ます。来年もまた、みんなで参加したいです。（枚方支援分会　林　陽子）

教師が子どもにとって社会を見る窓になる

全国青年教職員学習交流集会（ＴＡＮＥ！）

２月４日・５日の２日間、「全国青年教職員学習交流集会（ＴＡＮＥ！）」に参加しました。

１日目には、平井美津子さん（立命館大学非常勤講師）から「生きづらさに向き合う子ども」というタイトルでの全体講演がありました。大阪の公立中学校で奮闘されている平井さんは、「教師は未来のある仕事」と捉え、「反骨精神」で頑張ってきたと熱く語っていました。大学時代に「二度と戦争に突き進まないように学問で貢献してほしい」という恩師の言葉を胸に、これまで平和教育にも熱心に取り組んでこられました。毎回の授業で最初にその日の新聞を持っていき、「今こんなことが社会では起こっているよ」と伝えるそうです。教室から子どもたちに社会を見せることで、「教師が子どもにとって社会を見る窓になる」ことを大切にしておられました。

また、「いのちに向き合う教育ってなんだろう？」というタイトルで東京の青年の先生からレポート発表もありました。知的の支援学校から肢体不自由校へ初めて転勤して感じたことを話されました。気管切開や胃ろうのある子どもたちと関わることに最初は戸惑いを隠しきれなかったそうですが、徐々に子どもたちと打ち解け、その子の好きなことを探し始めます。たまたま指につけていた絆創膏の絵柄が「キラメイジャー」だったことから、休み時間にキラメイジャーのダンスを取り入れました。そうした好きな活動から徐々に世界を広げ、「友だちともっとかかわりたい！」というねがいを持てるようになりました。そのレポート発表の最後に話されていた「『いのちに向き合う』ことは、『子どもそのものと向き合う』ことではないか」という言葉は、その通りだなと思いました。どんなに重度の子どもであっても、一人の子どもとしてまるごと捉え、子どものことを知っていく。改めて大切にしたいことを考えることができました。

（青年部長　奥　正行）